様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　４ 月 ３０ 日現在

機関番号：３４３１６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ０１３１２

研究課題名（和文）記憶、歴史認識と政治ーイタリア植民地主義、バルカン占領、レジスタンスとサロ共和国

研究課題名（英文）Memory, Historical　Recognition and Politics

研究代表者
高橋　進（Takahashi, Susumu）

龍谷大学・公私立大学の部局等・フェロー

研究者番号：３０１３６５７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：イタリアの第二次大戦参戦がヒトラーに引きずられたものではなく、ムッソリーニの地中海・アフリカ、バルカン支配の願望に基づき、独自の「並行戦争」として開始された。しかし、軍事力・経済力の脆弱さのために成功せず、ドイツの軍事介入により立て直された。ユーゴはドイツ主導で開始され、独軍の力によって征服された。イタリアの併合と占領統治は武装レジスタンスに直面した。その鎮圧のために残虐な戦争犯罪行為を行うとともに、民族対立を利用して武装勢力を組織し、相互対立を扇動、内戦を誘発した。これは1990年代のユーゴ解体時の「民族浄化」先駆となったことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究成果の学術的意義は、①イタリアの第二次大戦への参戦が受動的な参戦ではなく、ムッソリーニの「帝国」建設の野望のための主体的な選択であったことの明確化。②日本で初めてのイタリアのユーゴ占領の実態とその意義の分析。③ユーゴ占領統治のための民族対立を利用した武装組織の創設が内戦の原因となり、それが「ヨーロッパの内戦」の性格を体現したことの分析。社会的意義は、①第二次大戦をヨーロッパに関しては「ヨーロッパの内戦」と見る視点の有効性の確認。②「ファシズム対民主主義」という第二次大戦間観を脱して複眼的に見る有効性を提示。③イタリアにおけるファシズムと第二次大戦の「記憶と歴史認識」と政治の関係の解明。

研究成果の概要（英文）：　The Italian memory and historical consciousness of Fascism and World War Ⅱ is Dictatorship of Mussolini, passive participation subordinate to Hitler, disastrous defeat in Africa, Balkan States and Russia, German occupation after surrender, Resistance and Liberation.
This thesis (Italy=victim and victor) is criticized from various directions. I analyzed the history of Italian nationalism, Mussolini's imperialism and his fantasy of Empire, Italian occupation in Yugoslavia. I cleared that Italian occupation was the decisive factor of civil war and ethnic cleansing in Yugoslavia. Then I showed that World War Ⅱ in Europe had the aspect of civil war.

研究分野：ヨーロッパ政治史

キーワード：ムッソリーニ　ファシズム　第二次世界大戦　ユーゴ占領　アフリカ侵攻　記憶　歴史認識　レジスタンス

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１. 研究開始当初の背景

本研究は、今日世界各国の現代史及び政治研究で議論されている「記憶、歴史認識と政治」の問題をイタリアに即して、第二次世界大戦史の研究視座の転換という観点も加えて検討するものである。具体的には第一に、イタリアのアフリカ植民地に対する植民地支配と抑圧の型、ファシズム期におけるその変化、バルカン占領へのその移入やドイツによるイタリア占領へのその逆輸入の関係を解く。第二に、レジスタンスとナチファシストの戦いをイタリアの「内戦」と捉えるとともに、第二次世界大戦をヨーロッパに関して「ヨーロッパの内戦」と位置づけ直し、その複合性と関連性を分析する。第三に、ファシストとナチスを対比した「良きイタリア人」対「悪しきドイツ人」像の意味とその変容、未完の脱植民地化問題及びイタリアの戦後政治体制の正当化原理である「レジスタンスから生まれた共和国」理念の危機の位相を明らかにする。それにより、イタリアの戦後体制の21世紀における再編成の課題及びポストEU統合下でのイタリアの政治的・経済的位置の模索状況の解明に寄与する。

本研究の基本的な学術的な「問い」は、「なぜイタリアでは、ファシズムに関して『良きイタリア人』という歴史認識が定着しているのか」「ファシズムの歴史修正主義、イタリアのナショナル・アイデンティティ論の隆盛の意味と相互関係は何か」「植民地支配・バルカン占領研究の進展と歴史認識をめぐる議論はいかなる関係にあるのか」「レジスタンスを内戦と、そして第二次世界大戦をヨーロッパ内戦と位置づけることによって、ファシズム研究と第二次大戦研究にどのような新しい視座が生まれるのか」「現代イタリア政治の不安定性の根源には何があるのか、それはファシズムの歴史といかなる関係があるのか」という一連の問いである。

本申請者がこのような問いを立てる学術的背景は以下のとおりである。

第一に、現代イタリア政治における歴史修正主義の意味の再検討の必要性である。1980年代後半から1990年代にイタリアでもイタリア・ファシズムの「歴史修正主義」論が、R. De Feliceをリーダーに隆盛となり、「レジスタンスから生まれた反ファシズムの共和国」という「公式の」戦後イタリア国家像への疑問を突き付けた。それは、ナチスの残虐性とイタリア・ファシズムの穏健性を対比することでファシズムを免罪し、「自由と民主主義の戦い」と位置付けられてきたレジスタンス像を否定し、レジスタンス勢力とナチス・ファシストとの戦いを単なる「兄弟殺し」の「内戦」と見なすことにより両者を同等視し、イタリア・ファシストを愛国者として救済することを企図していた(J.Jacobelli（a cura di）, Il fascismo e gli storici oggi,Laterza,1988)。この潮流は1990年代以後、「イタリアらしさとは何か」というイタリア・アイデンティティ論と結合し、学会及びマスコミ・ジャーナリズムで大きな地位を得るようになった(E. Glli della Roggia, La morte della patria, Laterza,1996; E. Galli della Roggia, Tre giorni nella storia d'Italia, Il Mulino, 2010) 。しかし、この両者の関係とその意味はイタリアにおいて十分検討されていない(E.Gentile, La Grande Italia,Latera,2006)。アイデンティティ論の隆盛は、もっぱらグロー

バル化とEU統合にその原因が帰せられている。本研究は人的にも内容的にも連結しているこの二つの議論の内在的な関係を明らかにし、それを手掛かりにヨーロッパ諸国に共通して隆盛するナショナル・アイデンティティ論の歴史的意味を解明する。

第二の学術的背景は、冷戦体制崩壊後の1990年代、特に2000年代に入ってからの植民地研究とバルカン占領研究の発展であり、これをファシズムの全体像と歴史認識問題の中で捉えなおす必要性である。イタリアでも「植民地責任論」の視点も提起され、その視点からの研究も出てきている。近年の研究の多くは、資料分析による植民地支配と占領の実態、抑圧内容だけでなく、植民地に行った普通の人々の思いと実状の解明によって、「良きイタリア人」像の修正を迫っている(N.Labanca, Posti al sole,Museo Storico italiano della Guerra, 2001;N.Labanca, Ortremare,Il Mulino,2002)。だが、これまでの研究ではアフリカ植民地支配研究とバルカン占領研究が切り離されている。それは、「ムッソリーニの帝国」「ファシストの帝国」像の「新ローマ帝国」「地中海新秩序」「地中海新ローマ帝国」「アドリア帝国」という形のばらばらな把握にも反映している(D.Rodogno, Il nuovo ordine mediterraneo,Boringhieri,2003;D.Conte, L'occupazione italiana dei balcani,Ordadek,2008)。本研究では、これらの先行研究を、アフリカ植民地支配のバルカン占領への「移入」と「他律的な脱植民地化」「帝国の突然の喪失」「帝国の忘却」という新たな視点から総括し、その背景の下での戦後の民主主義国家形成がもたらした問題を解明する。

第三の学術的背景は、第二次世界大戦をヨーロッパに関しては、「ヨーロッパ内戦」と位置づけ、この視点からイタリアのレジスタンスとナチファシストの戦いを「イタリアの内戦」と捉え直し、分析する必要性である。イタリアではパヴォーネの著書の刊行以来、内戦の視点に立ったレジスタンス研究とともに、サロ共和国を従来のように単なる傀儡政権と切り捨てるのではなく、その実証的な研究も進んだ。さらにパヴォーネはヨーロッパに関して、第二次世界大戦を「ヨーロッパ内戦」と捉える視点も提唱している (C.Pavone,Una Guerra civile,Boringhieri,1991;N.Bobbio/C.Pavone, Sulla guerra civile,Boringhieri,2015)。日本では現在のところ、この視点はあまり受け入れられていないが、戦争と植民地、歴史認識研究の進展は植民地における反抗の複合性を明らかにし、新たな視座の必要性を提起している（倉沢愛子他編『岩波講座　アジア・太平洋戦争』全9巻、2005~2015年）。近年の東中欧・バルト三国からの歴史認識の見直しの提起は、戦後世界の前提であった「民主主義対ファシズムの戦い」という第二次世界大戦像の修正を迫り、ナチス協力者がナショナリズムの視点からは愛国者でもある複雑な状況を明らかにしている（橋本伸也『記憶の政治』岩波書店、2016年）。本研究はこれらの提起を受けとめ、イタリアにおける「内戦」がもたらした戦後のイタリア人の歴史意識の複雑性と「忘却」の様相を明らかにする。

２. 研究の目的

本研究の目的は、ファシズムの植民地主義、バルカン占領、レジスタンスとサロ共和国などに関するイタリア及び欧米での近年の歴史研究を総括し、それを「記憶、歴史認識と政治」の視点から、そして「ヨーロッパの内戦」という枠組みから再構成することによって、現代世界における記憶、歴史認識と政治の問題に寄与することである。その独自性は、上記の３つの学術的背景が示すように、イタリア及び欧米の研究でばらばらに取り組まれている諸研究を「歴史認識」という１本の糸で総括することにより、イタリアにおける歴史認識と政治の状況を明らかにする点にあり、イタリアでもこのような研究はまだ存在しない。また、その創造性は、ファシズム研究への新たな視座の導入、脱植民地化の比較研究へのイタリアの事例の提供による貢献（日本ではイタリアの植民地および脱植民地化研究は皆無である）、欧米流の「民主主義対ファシズム」の対決という第二次世界大戦観に代わる、世界の戦後政治の新たな歴史的位置づけ・枠組みの探求に寄与するであろう。

３. 研究の方法

本研究は、ファシストの植民地支配やバルカン占領、レジスタンスとサロ共和国の実態を直接一次資料に基づいて分析することを企図していない。地理的・経済的・治安上の制約から、現地の資料館を訪ねて資料を収集することは、イタリアやバルカン諸国の一部を除いて困難である。本研究は、この制約の下で主としてイタリアをはじめとする欧米の上記のテーマに関する研究を渉猟し、それが分析・提供している事実と資料から、イタリア人の歴史認識を、ファシズムの統治と植民地および占領地の人々の意識との相互作用として、そして、同時に戦後の意識の問題として、それを現代イタリア政治との関連で明らかにする。

４. 研究成果

第一の研究成果は、イタリア・ファシズムの思想の重要な構成要素であるイタリア・ナショナリズムの形成と変容をイタリア統一国家形成期からファシズム時代まで明らかにし、さらに、第二次大戦後における「ナショナリズムの封印」と歴史修正主義の台頭及び「祖国」「愛国心」の復活との関係を明らかにしたことである。イタリアにおけるナショナリズムとパトリオティズム（祖国愛）との関係の歴史的な分析はこれまで十分ではなかった。また、戦後イタリアにおけるナショナリズムの弱さはしばしば指摘されてきたが、その原因をコムーネの伝統に求める議論がもっぱらであり、戦後の「公式の政治」における「ナショナリズムの封印」に主因があることを分析した研究は初めてである。この研究成果を論文「イタリア・ナショナリズムの歴史と変容　反ファシズムとネオ・ナショナリズム」として公表した。

第二の研究成果は、第二次大戦へのイタリア・ファシズム体制及びムッソリーニの参戦動機がたんにヒトラーに従属した不承不承の参戦ではなく、ムッソリーニの「帝

国建設」の野望の実現のための「並行戦争」を企図したものであること、そして、その野望はイタリアの軍事的・経済的な脆弱さ、戦争準備の不十分さだけでなく、地中海の持つ意味が歴史的に低下・変容したことによって最初から「幻想の帝国」であったことを示したことである。ムッソリーニの参戦動機は、欧米では種々論じられてきたが、これまで日本では本格的な研究は存在しなかった。また、欧米の研究に対しても、ムッソリーニの「帝国」構想の議論に一石を投じた意味がある。これについては、論文「それでもムッソリーニは賛成を選んだ　ムッソリーニ論余滴」として公表した。

　第三の研究成果は、イタリアのユーゴ占領の実態とその意味の研究である。ユーゴ占領は、本研究課題の目的の軸である「良きイタリア人」「悪しきドイツ人」というイタリア国民の「記憶と歴史認識」、第二次大戦の「ヨーロッパの内戦」としての側面、枢軸の侵略による内戦の勃発と「民族浄化」の例として重要な意味を有するが、これまで日本ではほとんど研究されてこなかった。本研究は、その点で先駆的な研究である。その内容は『龍谷法学』57巻2号（2024年9月刊行予定）で公表する予定である。また、2024年10月の日本政治学会の分科会で発表予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 高橋進	４．巻 61
２．論文標題 それでもムッソリーニは参戦を選んだ―ムッソリーニ論余滴	５．発行年 2023年
３．雑誌名 日伊文化研究	６．最初と最後の頁 16~28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 高橋進
２．発表標題 戦後イタリア・ナショナリズム考察のためのデッサン
３．学会等名 龍谷大学社会科学研究所共同研究「現代西欧諸国における国民再統合と政治統合の模索に関する比較研究」
４．発表年 2021年

〔図書〕　計2件

１．著者名 渡辺　博明	４．発行年 2023年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 282
３．書名 ポピュリズム、ナショナリズムと現代政治	

１．著者名 高橋進他（渡辺博明編）	４．発行年 2023年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 260
３．書名 ポピュリズム、ナショナリズムと現代政治	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関